

2023年1月13日

『みんなのスポーツ』1・2月合併号 (No.490) から学ぶ

林 但

平素より協議会の活動にご理解をいただきありがとうございます。

表記、公益社団法人 全国スポーツ推進委員連合機関誌の1・2月合併号は「**第63回全国スポーツ推進委員研究協議会**」の特集号です。

私が今月号で感じたこと・参考になる点、気になったことの中から2点記載します。

1. 特集 「わた SHIGA 輝く未来をはぐくむ」 第一分科会の内容

私も参加いたしました、大会であり第一分科会です。昨年3月に発表された第3期スポーツ基本計画では、社会の状況や個人が置かれている状況に応じて、既存のスポーツの枠組みや考え方のみにとらわれことなく、柔軟に見直し、改善し、創り出すといったスポーツを「つくる・はぐくむ」という視点が必要になると考えられています。第一分科会では、「With コロナ」での活力ある地域社会の実現を目指し、ユニークな取り組み事例の紹介が3件ありました。

中でも滋賀県甲賀市の「新しい生活スタイル」への第一歩“できることから始める”の事例報告。組織運営の危機に直面した場合、発想の転換を図り「できることから始める」という視点に立って「リスクリング(学びなおし)」と「デジタルトランスフォーメーション(活動の効率化と活動の成果の可視化)」に取り組まれたとのこと。**特にリスクリングについて、コロナ禍で活動ができず待機時間が増えたため、その時間を活用して資格取得や知識・スキルの獲得を奨励することによって推進委員ができる！という感覚を抱くことで行動変容につなげようとされたこと。全く同感！！**

コロナ禍だからこそ、既存の枠組みや固定観念を払拭し思い切ったりフレミング(見つめ直す・捉え直すこと)が必要です。私たちスポーツ推進委員は「何をするか？」ではなく「どうなりたいのか？何を成し遂げたいか？」という成果を再定義すること。今まで培ってきた地域を見つめる眼差しやネットワークなどを活かして、人と人をつなぎ関係をデザインすることなどを通して「創造力」が求められているとの報告。同感で私も地域ではじめていますが、成果は目に見えてこない、自分にできることに取り組む日々である。

2. わが町の健康・体カづくり 岩手県奥州市

5市町村が合併して15年前にできた市で、「ニュースポーツを活用した生涯スポーツの推進」の事例紹介がありました。勝敗よりも楽しさの追求を主眼においたスポーツで、「モルック」がメディアに取り上げられ、全国的にも知名度が高まっています。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、市民の運動離れが懸念される中、ニュースポーツを活用した生涯スポーツの推進に取り組んでいる。R3年は外部から講師を招き、モルックの実技研修会を開催した。講師からは、「指導をする際は、細かいルールよりいかに楽しさを伝えられるかが重要」という言葉に耳を傾けながら、それぞれの指導方法を熱心に学ばれたとの事。

上記をふまえR4年11月に体験型スポーツイベント「チャレスポおうしゅ」を開催。乗馬からニュースポーツまで幅広くスポーツ体験会が開催された。この中にモルック体験ブースがありました。ブースでは子供や高齢者の場合は公式ルールを変更してスキttl(標的)まで距離を近くしてモルックが届くようにして楽しんでもらえるようにした。パドミンTONのオリンピックの小椋久美子さんにもモルックのデモンSTRATIONに加わっていただき長蛇の列ができるほど好評のうちに終了したとの事。

モルックはここ数年間で競技人口は増えたが、他にも魅力的な種目があり、研修会を充実させニュースポーツの技能吸収を図り市民に還元していくと奥州市の事例は結んでいる。

今月号は2つの事について記載致しました、知っていることが多いと思う方もあるかもしれませんが、気づいたことでできることから始めて(行動)みませんか？

*本冊子は有益で私たちの活動のヒントや答えがあるように私は思います。年間購読されなかった方は、個別にも購入はできますので一度読んでみてください。問題意識や感度を高めていくと紹介されている事例が使える場合とこのままでは使えないがこうすればできる。こんな方法もあるなど感ずると思います。是非一緒に取り組んでいきましょう！
本冊子読んでみたい方は事務局又は私に声かけていただければお借し致します。

以上